報告Ⅲ

仏教界の現在と未来―檀家の立場よりみて―

佛教大学仏教学部教授
並川孝儀

1　はじめに

（1）　インドに興った仏教は多くの国に伝播したが、その中で伝来して2300年ものあいだ続いてきたのは、一国単位でいえばスリランカぐらいである。これほど長く保持されているのは、おそらく国家宗教や仏教王権の性格を保ち続けてきたからであろう。東南アジア諸国も同じように伝統的な上座仏教王権に基づいた国家形成という理由で今日まで存続している。しかし、こうした国々とは別に、インドでは興起しておよそ1500年で滅し、中国に伝来してからおよそ1500年経った明の時代ごろにはほぼ衰退し、チベットではまだ1500年も経っていないが、政情不安によってこれから先の見通しも立っていないのが実情である。

日本では伝来しておよそ1500年がちょうど今経過しようとしている。一国だけで見れば、その理由はさまざまであるが、仏教がそれぞれの国に根付いてきた期間は偶然の一致なのか、ほぼ1500年間ということになる。この1500年は、いみじくもインドで仏教が興ってから日本の平安時代末期から鎌倉時代に入った頃に、正法・像法が終わり、まさに末法の到来を自覚するまでの期間に相当しており、三時という比喩的な時代区分ではあるが、あたかも現代という時代は末法と同様な状況に置かれているのではないかということを想起させてくれる。つまり、現代またはきわめて近い未来に仏教の衰退・破滅の時代が到来するのではないかという危機感をおこさせてくれるのである。

また、インドから多くの国々に伝播した仏教はそこで栄え次第に衰退期を迎えるという変遷を辿りながら、異なった国へと伝播することで今日まで存続してきた。北方伝承では日本はまさに地理上の最果ての国であり、もう日本から次に伝播する地域は見当たらない。地理的なこうした状況を眺めると、仏教の行く末はもうないかのようである。

このように、地理的にも時代的にも終末を思わせる状況は、今まさに置かれている日本仏教を象徴しているかのようである。しかし、この悲観的な状況が仏教からすべての可能性まで奪い取るという認識は正しくない。仏教は、歴史を見れば判るように、常に興起→発展→衰退という展開の連続であるが、衰退を迎えると、新たな価値をもった仏教が出現して発展していったことは一々具体例を挙げるまでもない。その際に常に契機となったのは、理想的自己を実現する方法や、苦悩からの脱却の方法、人間救済の方法などさまざまであるが、いずれもそこで苦悩する人々の生きるべき道を探究した内容である。現在の状況は、今こそこうした生きるべき道を人々に示す新たな仏教の出現か、現代に沿った仏教の蘇生を要請しているのではないかと理解できる。その場合、我々は第二の法然・親鸞・道元・日蓮などといえる、真理を体現した偉大な仏教者の出現とその導きをまつべきなのか、或いはそれと異なった新たな仏教を仏教界全体が協力して再構築するべきなのであろうか。いずれにせよ、今、この現状を正しく認識することもなく行動も起こさなければ、仏教の未来は暗いと言わざるを得ないし、間違いなく衰退・滅亡への道を黙って見守ることになるであろう。

（2）もとより、仏教の歴史は開祖ゴータマ・ブッダの教えを絶対的命題として変わることなく今日まで伝えられてきたわけではない。むしろ反対に、それぞれの時代と地域に生きる人々の要請に応えるべく、それにふさわしい教えを創出するといった変貌を遂げながら、常に新たな仏教を開花させてきた。その連続面が仏教の歴史といってよいであろう。時に偉大な仏教者の出現によって、時に大きな集団のうねりによってそうした変貌を可能にしてきた。まさに、多様性の歴史である。この仏教の多様性には、ある状況が備わっていなければならない。それぞれが固有の風土、文化、社会の中で育まれているということ、そして宗教として民衆に生きる道を示す力が横溢している状況にあるということが、この多様性の条件となろう。そう考えると、たとえば今日のグローバル化社会に照らしてたびたび提言される日本仏教と上座仏教の区別や枠組みを超え一つになるといった発想や日本仏教の上座仏教への回帰といった発想はこの多様性の条件に適合しないし、また単に維持されているだけで停滞している各宗派の状況も多様性を呈しているとは言えないのである。

仏教の歴史をこのように見れば、現代というこの時代、日本というこの地域に生きる我々の要請とは一体何であり、それにふさわしい教えとは一体何であろうかという姿勢がまず求められる。今、仏教の本質ともいうべきこうした問題が摸索されなければならないはず

である。そこにこそ、他の宗教にはない仏教ならではの意義がある。では、その実現のためには、どのような方法があるのであろうか。

2　日本仏教の現状と問題点

現在の仏教を考えるには、危機的状況にあるという視点、今の時代と日本の現状にふさわしい仏教は何であるのかという視点、この二つの視点からシンポジウムのテーマについて考えてみたい。「日本仏教に未来はあるか」というテーマは、決して仏教界の延命策を論じることではないし、そうあってはならない。しかし実際のところ、ほとんどは既存の仏教の延命策か、それに準じた内容に終始しているように思える。いくら学問的な装いを施していても、そうした議論は何も産まないし、仏教の未来を問うものでもない。未来を問うということは、今を直視し、今を問うことに他ならない。今を直視し今を問うことは、仏教界という特定の世界から眺めることではなく、日本社会全体に横たわる、あるがままに生きる人々の苦悩と切実な声に耳を傾けることを意味する。仏教界は、何よりもまず、その声を聞き、直視し、実感する姿勢が求められる。つまり逆説的な言い方ではあるが、仏教界がこのテーマを考えるためには、既存の仏教の立場を離れた視座が必要であるということなのである。仏教界に求められる姿勢は、まず社会全体を仏教の既存の価値観を離れて虚心に直視し、それを通して現実を実感し、人々の苦悩にどう関わるべきかという使命感をもつことである。

ではここから、これを実現するために、仏教界がどう対応すべきなのか、またどう在るべきなのかを考えることにしたい。そのためには、まず仏教界の現状から眺めなければならないであろう。

その前に、筆者は檀家であるので在家の立場から論じることを断っておきたい。立場上、現代仏教とりわけ宗派仏教の現状を正しく認識しているか不安であるが、しかし、仏教界を形成しているのは寺院・僧侶だけではなく、檀家などによっても支えられている訳であり、その意味で、檀家は仏教界に関わりながらも直接的な利害関係もなく客観的に眺めることのできる立場にあるといえる。その視点は仏教を考えるために不可欠であり、そこから仏教界の現状と未来に向けて提言することには一定の意義はあろう。

それでは、まず日本仏教の現状、特に仏教教団の現状を、内的な状況と外的な状況とに分けて考えてみたい。宗派、地域、また個人によってもそれぞれに違いがあり、総じて言

えるものではなく、したがって、あくまで総論・一般論として論じることを断っておく。

〔内的状況〕

(1) 仏教教団および僧侶は、現代社会を正しく認識しているのか

仏教のさまざまな蘇生の歴史は、すべて時代性とその時代に生きた人間の願い・要請から興ってきたものといってよい。では、現代の仏教界がこの時代と人々をどう認識しているのか。残念ながら、多くは現実の社会に目を向けていないし、当然のこと、対応もできていない。端的にいえば、社会と乖離した状況にあるといえる。自坊の維持、宗派の維持が目的となった、つまり閉じられた宗派社会の中で活動しているだけのように見える。こうした状況は、何も今に始まったことではない。近世以後、政治権力によって作り出された檀家制度などの中で――たしかに、それを布教活動の場として活用していたことも事実であるが――仏教界は制度を押しつけられて主体性や本来的な宗教性を失い、民衆の心から離れてきた経緯があり、それが数百年にわたって今日まで存続してきたものと言わざるを得ない。

(2) 僧侶は自らをどう認識しているのか

僧侶は自らを仏教者と認識しているであろうが、では、その仏教者とはどういう存在としてであるのか。それは寺院管理者としてであるのか、仏教儀礼・法式の専門家としてであるのか、それとも人格の完成をめざし仏道を歩む存在としてであるのか。寺院管理者、仏教儀礼・法式の専門家であれば、それ自体、有益な存在ではあるが、しかし寺院の維持など日常的な運営にのみ専念し、さほど専門能力も高くなく、ましてや仏道を歩むといった宗教性とは無縁な僧侶が多く見受けられる。僧侶とは何か、どうあるべきか、ということが真正面から考えられていないように見える。

(3) 僧侶は属する宗派とどう関わっているのか

僧侶は自ら属する宗派の教義をどの程度理解し実践しているのか。また、宗派と関わる意義をどのように認識しているのであろうか。実際は宗派に属しながらも、宗派のもつ教義を十分に理解しているとは思えず、また教義と連動した活動もあまり見られず、一寺院の僧侶として葬儀など先祖供養などを中心に個々に行動している傾向が強い。したがって、檀家は寺院・僧侶を通して宗派の教えなどに触れる機会が極めて少ない。他方で、僧侶は宗派の構成員であるという組織に対する帰属意識は強く、排他的であるようにも見受けられる。

(4) 僧侶は檀家をどういう存在と捉えているのか

単に先祖供養者との認識であるのか、それとも宗派の教義の布教など宗教活動の対象者として捉え行動しているのか。ほとんどは檀家を先祖供養者とし、寺院・僧侶の経済を支える存在と見なしているに過ぎないのではないかというように思われる。こうした現状を僧侶は是としているのか、非としているのか、どう在るべきと考えているのであろうか。

(5) 僧侶の世襲に意義はあるのか

世襲制は宗派の維持のために、また寺院の存続のために――寺院・僧侶の事情だけでなく、檀家の意向や要望を汲む場合もあろうが――不可欠な制度といえ、今日までそれ相応の意義を有してきた。しかし、現状ではむしろそれが改革の障害となっている側面も見られる。なぜなら、僧侶になることを希望していないなど理由はさまざまであろうが、要するに自らの意志で選択した者が少ないからか、世襲する者には本人の責任とは別に自発性や主体性が希薄で、将来に対する希望や目的も持ち合わせていない者が多く見受けられるからである。そうして僧侶となった者は僧侶としての自覚が乏しいのは当然で、ましてや仏教の現状や社会に対してもほとんど無関心で、とても改革を行うすぐれた人材とは考えにくい。大学において宗侶養成の現状を長く見てきた経験から、こうした状況が顕著に現れ出ているといってよい。寺院における仏教活動や檀家との関係なども一層脆弱なものとなるであろう。

(6) 各仏教教団の現状

各宗派にはそれぞれに教義があり、それぞれに存在意義を有するものである。しかし、その多くは檀家や一般の人々にとってほとんど認知されておらず、その意義を十分に見出し得ない状況にある。

教義に基づき人々に向けられた宗教的実践よりも、教団だけに通じる価値観による活動や、各教団の組織を維持するための活動など、世俗一般の組織の実態と変わらない現状が目を引く。仏教教団は形骸化が進み、檀家や一般の人々にとってはますます仏教教団への尊敬と信頼は失われてしまうように見える。偉大な開祖によって唱えられた宗教性の意義は著しく変質し、衰退してしまっているといえよう。

一般的に、活発な時期ほど危機意識が強く、反対に停滞期や衰退期ほど危機意識が乏しいものであるといわれるが、今日の仏教界はまさに後者の状況を呈している。改革は、まず自己否定から始まるものである。今、仏教界や、個人としての僧侶に今ある自己への否

定といった姿勢は窺えるであろうか。それがないとすれば、それは自己認識が欠落しているためなのか、あるいは自己の正当化に邁進しているためなどであろうが、どちらにしてもそうした姿勢が目に付く。

〔外的状況〕

(1) 寺院の経済的状況

地域や寺院によっても、また宗派によっても異なるが、どの宗派も檀家信徒に依存するという既存の活動を続ける限り、少子・高齢化社会の到来によって日常的な宗教活動も減少し、それに伴って経済状況も著しく悪化し、多くの寺院はその存続が問われるほどの深刻な状態に至るであろう。寺院数の減少は勿論のこと、今以上に兼務の僧侶が増加し、その結果として、僧侶の質の低下、僧侶としての自覚の低下を一層加速することになる。経済事情は宗教の本質的な問題ではないと考える向きもあろうが、教団および寺院は一定の経済的基盤を無視して成立しえないのも事実である。ある意味、経済的状況の悪化は宗派・寺院・僧侶の弱体化とパラレルであるといえる。

(2) 檀家から寺院・僧侶はどう認識されているのか

寺院の実情を知っている檀家は、僧侶を自己完成をめざし仏道を歩む宗教者、つまり〈聖なる存在〉とはほとんど認識しておらず、〈俗なる存在〉という認識をもっている。明治時代以後に教団が在家仏教化したにもかかわらず、いまだしばしば僧侶を出家者と表現する場合が多いが、現在の僧侶で出家している者はほとんどいないので、僧侶も在家者といわねばならない。この表現の曖昧さは、僧侶の在り方、ひいては仏教界の在り方に対する正しい認識を妨げ、間違った現実を容認することにもなる。

一部には仏教の教えに従って老死など人生の問題を真正面から見つめ説法されている僧侶もおられるが、現実的に見れば、多くの僧侶は寺院管理者であったり、儀礼・法式の専門家と認識されている。つまり、寺院管理や、葬儀・法事などの仏教儀礼以外、日常生活や生き方は在家者である檀家と同じで、そこに聖なる宗教性を見出しえないのは当然である。したがって、檀家は僧侶と先祖供養などを介した限定的な関係でしかなく、寺院はそれを執り行う場としてのみ認識している。それ以外に求められる場ではなくなっているからであろうか、檀家は寺院の属する宗派の教えに関する知識も興味もなく、他宗派との違いすらほとんど認識されていない。いわんや、仏教の世界観や人生観など何を教えている

宗教であるのかも全くといってよいほどに理解されていない。

しかし他方で、僧侶は我々俗人とは違い尊敬し信頼すべき、時には聖なる存在であると漠然と願っている面があるが、僧侶が在家者と何ら変わらない存在であることを知って、逆に尊敬の念が消え、さらには不信感も募り、寺院との係わりが一層薄まっている。檀家と寺院・僧侶の関係は運命共同体であるから、そうした関わりが寺院・僧侶の未来を決定づける大きな要因ともなる。

(3) 世間一般から仏教はどう認識されているのか

世間一般から仏教はほとんど理解されておらず、興味も示されていない。いわんや、それぞれの宗派の存在やさらには教義などを理解しているものは極めて少ない。また、理解している人も寺院、仏像という存在、僧侶という存在を外見から認識しているにすぎない。しかし一方で、漠然と世俗性を離れた仏教者、仏教者集団という認識もある。こうした認識のずれが、寺僧や、ひいては仏教界の現状を直視することから妨げているように思える。

(4) 寺院の意義

一部の寺院は、観光寺院として、癒しの場として存在意義をもつ。一般の寺院に対する関わりは、ほぼ先祖供養に関する事柄に尽きる。一般的に、寺院が属する宗派を区別する認識はほとんどないし、また関心もないといってよいであろう。

以上、仏教界の現状を檀家の立場より見てきたが、ここで補足しておかなければならない点がある。こうした状況に至ったのは長い間にわたってさまざまな原因・理由が複合化して定着し慣例化した結果であり、現在の僧侶にその責任をすべて問うべきものではない。しかし、停滞した現状を認識しながらも対処しなければ、その時は現在の僧侶に責任があると言わざるを得ない。何よりも、未来の仏教の如何については、まさに現在の仏教者に負うべき責任と使命があることを自覚するべきである。ただ、寺院・僧侶と関わってきた檀家も共にこうした状況に至った経緯に自覚をもち適切に対応する姿勢が必要である。

3　今後に向けての提言

(1) 宗派の自己矛盾

時代・地域・人間の能力などに相応した教えの出現の連続面が仏教の在り方であることと、他方で開祖の教えを守り続けるという宗派の在り方をどう関連づけて考えるべきであろうか。この両者は、ある意味、社会に開かれた宗教の在り方と宗派性を守り続ける閉じ

られた宗教の在り方を示したものと理解でき、一見、二律背反の関係を呈しているようである。つまり、時代を捉え、その時代に生きた人々にふさわしい教えを説いた開祖の宗教的な意向と、時代が変わろうとも開祖に対する信仰と教えの継承という宗派のもつ二つの在り方に、仏教という視座から見て、相反するベクトルが内包されているように思われる。どの宗派も成立した時にはその時代にふさわしい存在理由があったが、時代や状況が変わった時、その意義も当然のことながら変容しているはずである。現代という時代を考える時、宗派のもつ特性を宗派内だけの問題として収束しようとするのではなく、宗派を超え、対社会的な範疇で考える時期がきているのではないかと考えられる。そうした矛盾の超克が、今、求められている。

(2) 宗派が取るべき道 (1) ― 宗派内改革か、脱宗派か

宗派内での自己改革を進めようとするのか、あるいは宗派の枠を超えて新しい改革を成し遂げようとするのか、今きわめて重大な選択に迫られている。宗派内改革は檀家信徒を中心とした、まさに閉じられた社会の中での改革であるのに対し、脱宗派的な運動は、他宗派との障壁を低くするのは勿論のこと、従来の檀家信徒のほかにそれまで仏教に関わらなかった人や仏教離れしていった人をも包み込んだ、まさに外へと開かれた改革となるであろう。宗派内改革であろうと脱宗派であろうと、宗派は現代に即した新たな改革が要請されていることを自覚し、宗派間を超えて共に新たな仏教運動も考えなければ、日本においてもはや仏教は存在できなくなるであろう。仏教の多様性の意味を考えれば、グローバル化時代に合わせて日本仏教と上座仏教という異文化に育まれた仏教を無条件に一体化することよりも、日本という同一性の中で多様化した宗派仏教の脱宗派を考えるほうが必然の流れといえよう。

(3) 宗派が取るべき道 (2) ― 対社会的改革

どちらの選択であろうとも、宗派内だけで帰着してしまう改革、即ち宗派内の価値観だけに基づいた改革であれば自己満足に終わり、決して時代の要請に応えることはできない。現代社会を直視し、その切実な声に呼応した改革こそが、仏教界が今しなければならない重要課題である。開かれた社会の実現のために、時として宗派自体の抜本的変革が要請されることを覚悟し、それに向けて自発的に行動を起こさなければならない。たとえば、大乗仏教の興起や鎌倉時代の新仏教の出現など、仏教の歴史からその意義を学ばなければならない。改革は、仏教界だけではなく、在家仏教者、また仏教と直接関わらない一般人と

共に知恵を出し合い行動すべきで、まずそういう場を仏教界は設定すべきである。インドでの出家主義・権威主義の批判を通して一部の出家者と在家者とが協力して大乗仏教が興起した時も、そのようではなかったかと考えられる。

(4) 近未来に向けて仏教に望むこと

今日の社会は、今まで経験しなかった、少子・高齢化社会による社会構造・人口構造の変質、IT社会による人間関係の変質、社会性の欠落、人間性の喪失という状況が到来している。まず、そのことを直視し、それに対応できる活動が望まれるし、こうした現状認識から新しい仏教は始まらなければならない。宗派の価値観だけに依存した内向きな活動は、まさにその宗派自体も一般社会と同じように閉塞状況に陥ってしまう。ついには、教団自体も救済の対象となってしまうのではないかという危惧をいだく。各宗派の僧侶は、その活動の対象・範囲を外に向け、そして同時に宗派の教義性に依りつつも仏教界全体が共に活動できる許容性を相互にもたなければならない。

寺院・僧侶は、従来より地域の中核として檀家と関係性をもち、今でも都市部以外ではそうした関係を大抵維持している。しかし、その関係性も都市部では崩壊しつつあり、それ以外の地域でも薄れてきている。もとより、檀家制度は押しつけられた寺院・僧侶と檀家との枠組みであるので、その状況から脱して、新たな地域共同体（コミュニティ）の中心的役割をはたす体制へと移行すべきではないであろうか。原始仏教でよく灯火、島、洲で喩えられる人々のよりどころと同じように、寺院・僧侶をコミュニティの中の避難所として、先祖供養との関わりだけではなく、人々の安らぎや癒しの場、また人々の交流の場と位置づけ、彼ら仏教者が主体的に取り組む「寺院・僧侶と地域の人々」という新しい寺院仏教の枠組みが形成されるべきであろう。何よりも、寺院・僧侶は仏教活動の最前線であり、この開かれた寺院を拠点とした積極的な活動は大変意義深い。その活動こそ、仏教の生命線といってもよいはずである。時代に対応できず停滞した仏教界の、さまざまな困難や障害を打破しきれない現状に対して、こうした活動こそが現実的かつ具体的に改革の道筋を示してくれるはずである。

こうした僧侶の活動を支えるためには、僧侶自身の人間性によることが大きいが、各宗派の教義であろうと通仏教の立場からの思想であろうと、現代に即した人生観・世界観を人々に説き示すことのできる仏教思想の構築が必要ある。現代の仏教者は、その構築に向けて最大の努力が望まれる。

(5) 僧侶のあるべき姿

時代を創出する偉大な仏教者の出現が叶わなければ、仏教者たちが協力し合って新たな運動を起こすほか道はない。その最前線で活動するのが僧侶である。

これからの僧侶像を、次の三種に分類してみる。

・修行を実践し、人格の完成をめざす仏教者という存在

——修行を重ね仏道を歩み人々の心のよりどころとなる聖なる宗教者として

仏教が改革される歴史には、かならず宗教的実践に裏付けられた偉大な仏教者の存在のあったことを忘れてはならない。仏説に新たな解釈を施した仏教者も、単に理性だけに基づいた解釈ではなく、常に優れた仏教の実践者として存在していたのである。現代の仏教には、そうした宗教的実践の重要性が失われており、そこに目が向けられていないように思える。

・社会的役割を果たすべくコミュニティの中心として人々の現実生活における救い手となる存在

——社会活動者として

社会活動者としての僧侶は、宗教的実践によって形成された人間性や知性などによって、地域の人々や高齢者などに対するよりどころとしての役割をはたすべきであろう。ただ、仏教は、社会を作るのではない。その社会を的確に捉え、人間の生き方・生きるべき道を示すことにある。仏教の歴史にも社会性を伴った宗教運動のような事例も見られるが、それはむしろ特例といったほうがよいであろう。

従来型の僧侶から社会状況に対応できる僧侶への転換が望まれる。そのためには、こうした人材養成を実現するために大学でも従来型の法式中心の宗侶養成からの転換も必要となろう。また、次世代の僧侶の教育も、大学での教育に依存せず、自坊における師僧の教育を重要視すべきであるが、ほとんどなされていないのが実情である。社会活動者としての僧侶となれば、主とした活動拠点が自坊を中心となるだけに地域の人々との交流を考えれば、大学入学前の自坊での教育も不可欠となろう。次世代の教育は、大学だけの問題とせず、宗派全体の取り組むべき重要課題である。

・寺院管理者や、儀礼・法式の専門家として活動する存在

——寺院管理者、仏教儀礼の専門家として

こうした僧侶は、高度な能力をもって仏教の諸文化を継承する専門家としての役割をは

たすであろう。

今後、これらのいずれにも当てはまらない僧侶は陶汰されていくべきである。

ここに僧侶像の分類を提示したが、その分類の意義は、従来まで世間から僧侶とはいかなる存在であるのか漠然とし正しく認識されてこなかったということに対して、また一方で僧侶自らも自分の存在を正しく認識してこなかったことに対して、それぞれの存在を明確化するところにある。そして、自他共にどの僧侶がどういう仏教者であるのかを認識し自覚することこそが、仏教界への現状批判と社会に開かれた新たな仏教運動を呼び起こす第一歩になるはずである。

4　おわりに

すでに、室町時代には僧侶と檀家の関係や門徒組織による民衆と僧侶との結びつき、また葬送や祈祷などによる両者の関係は見られたが、江戸時代に入るとすぐにキリシタンの禁制を契機として宗門改めの施行や寺請証文の発行などに伴い檀家制度が成立し、また寺院法度による寺院・僧侶への義務の制定によっていわゆる葬式仏教なども確立するようになった。ここにおいて仏教の社会的意義が固定化されるようになり、明治に入り神仏分離令発布や寺請制度、宗門人別改帳の廃止などがあったものの、その体制はほぼ現代まで継承されている。信者の増加や寺院の建立、宗派仏教の進展などの側面から見れば仏教が盛んになったともいえるが、それは江戸幕府の政策による制度であって、当時の人々の信仰とも必然性があったわけでもなく、また何よりも仏教界の自発的、主体的な制度改革ではなかったことは、仏教にとっての根本的な問題を負の遺産として孕み続けることになった。

今、求められるのは、仏教界がそうした抑圧ともいうべき歴史から脱することである。最近、こうした状況を脱するために主張される一定の論調が見られる。つまり、それは近代化による合理性の限界を見直し、見捨てられてしまった過去の思想や信仰に目を向けようとの提言である。この提言は仏教の問題に限らず、今日の日本社会全体を見直す時に用いられる常套句ともなっているものである。たしかに、そこには近代化によって生じた問題の一面が言い当てられているが、仏教の未来を論じる場合にはそのことよりも前に前提となるべき視点がある。それは、今がどうであるのかという状況を正しく認識することと、人々が何を要請しているのかを洞察すること、そしてこのままではどうなってしまうのかという危機感を感得することである。それなしでは、見捨てられてしまった過去の中から

思想や信仰を闇雲に探し出すようなものであって、現代に即する仏教を見出し得ないであろう。歴史を分析するだけでは、未来への展望は何も見えない。また、宗門人が近代化を否定し、過去の思想や信仰から非近代性を探り当てて仏教の蘇らそうとしても、結局は自己の属する宗派の正当性を主張するための宗派意識が顔を覗かせるぐらいなことである。

今、最初に行うべきことは、この日本の現代社会にふさわしい人々の要請に謙虚に耳を傾け、自発性と主体性によって人々の避難所となるべき寺院・僧侶を確立することではないであろうか。宗派という既存の枠組みの中から時として超え、新たな枠組みを摸索しつつ、コミュニティの中核として、現代社会に生きる人々の苦悩とその病巣を的確に捉え、それに応えうる活動を行うことが、未来に向けた仏教改革の第一歩となるであろう。仏教の歴史の多様性は、常にこうした時代と空間に即した改革の連続によって生じてきたものであると知るべきである。

このことを急務であると自覚しなければ、仏教が衰退の一途を辿るのをただ見守ることになるであろう。

仏教界の現在と未来　―檀家の立場よりみて―
（発表要旨）

並川　孝儀（佛教大学）

1　はじめに

(1)　インドで興った仏教が伝播した国の中でスリランカや東南アジア諸国のように上座仏教王権に基づいた国家形成という理由で今日まで存続した国々とは別に、インドでは興起しておよそ一五〇〇年で滅し、中国ではおよそ一五〇〇年経ったごろにはほぼ衰退していた。日本では伝来しておよそ一五〇〇年がちょうど今経過しようとしている。仏教がそれぞれの国に根付いてきた期間は偶然の一致なのか、ほぼ一五〇〇年間ということになる。この一五〇〇年は、いみじくも正法・像法が終わり、まさに末法の到来の期間に相当しており、三時という比喩的な時代区分ではあるが、まるで現代またはきわめて近い未来に仏教の衰退・破滅の時代が到来するのではないかという危機感をおこさせてくれる。

また、仏教はインドから多くの国々に伝播し、そこで栄え次第に衰退期を迎えながら、異なった国へと伝播し、そこで新たな仏教がおこるという歴史をもつ。北伝では、日本はまさに地理上の最果ての国であり、もう日本から次に伝播する地域は見当たらない。こうした地理的状況は、仏教の行く末はもうないとでも言っているかのようである。

地理的にも時代的にも終末を思わせるこうした状況は、今まさに置かれている日本仏教を象徴しているかのようである。しかし、仏教は、歴史を見れば判るように、常に衰退を迎えると、新たな価値をもった仏教が出現して発展してきた。したがって、この現状は、我々に今こそ新たな仏教の出現や現代に即した仏教の蘇生を要請しているとも認識できる。

(2) もとより、仏教の歴史は開祖ゴータマ・ブッダの教えを絶対的命題として変わることなく今日まで伝えられてきたわけではない。むしろ、時代と地域に生きる人々の要請に応えるべく、それにふさわしい教えを創出しながら、常に新たな仏教を開花させてきた。その連続面が仏教の歴史といってよいであろう。その視点から見れば、現代というこの時代、日本というこの地域に生きる我々の要請とは一体何であり、それにふさわしい教えとは何であろうか。今、仏教の本質ともいうべきこうした問題が摸索されなければならないはずである。

2　現代仏教の問題点

現在の仏教を考えるには、このように危機的状況にあるという視点、今の時代と日本の現状にふさわしい仏教は何であるのかという視点、この二つの視点から考えられるべきである。「未来の仏教」を考えるためには、先ず現在の仏教の現状すべてをあるがままに認識することである。

〔内的状況〕

(1) 仏教教団および僧侶は、現代社会を正しく認識しているのか

仏教のさまざまな蘇生の歴史は、すべてその時代性とその時代に生きた人間の願い・要請から興ってきたものといってよい。では、現代の仏教界がこの時代と人々をどう認識しているのか。残念ながら、多くは現実の社会に眼を向けていないし、当然のこと、対応もできていない。自坊の維持、宗派の維持が目的となった、つまり閉じられた宗派社会の中で活動しているだけのように見える。

(2-1) 僧侶は自らをどう認識しているのか

僧侶は自らを仏教者と認識しているであろうが、では、その仏教者はどういう存在としてであるの

か。それは寺院管理者としてなのか、仏教儀礼・法式の専門家としてなのか、それとも人格の完成をめざし仏道を歩む存在としてなのか。僧侶とは何か、どうあるべきか、ということが真正面から考えられていないようにも見える。

(2-2) 僧侶は属する宗派をどう認識しているのか

僧侶は宗派の教義にどこまで基づいて活動しているのか。ある面では、宗派の構成員であるとの組織に対する帰属意識は強いが、葬式、法事などを中心に寺院個々に行動している傾向がみられる。したがって、檀家も宗派の教えなどに触れる機会が少ない。

(2-3) 僧侶は檀家をどういう存在と捉えているのか

単に先祖供養者との認識なのか、布教など宗教活動の対象者として捉え行動しているのか。現実は、寺僧の経済的基盤としての存在に過ぎなくなっているようにも思える。こうした現状を僧侶は是としているのか、非としているのか、どう在るべきと考えているか。

(3) 僧侶の世襲の意義はどこにあるのか

世襲制は宗派の維持のために、また寺院の存続（寺院の事情だけでなく、檀家の意向も含む場合が多いが）のために不可欠な制度といえ、今日までそれ相応の意義を有してきた。しかし、改革の障害となる側面も見られる。概して、世襲する者の多くは自発性や主体性が希薄であり、僧侶としての自覚も乏しい。仏教の現状や社会に対しても無関心で、総じて改革を行うすぐれた人材とはいいにくい。

(4) 各仏教教団の現状

各宗派にはそれぞれ教義があるが、多くは檀家や一般世間に十分に認知されていない。教義に基づいた宗教的実践や社会への関わりよりも、教団だけに通じる価値観、教団内での既得権をいかに守るかという宗派の現状は、檀家や一般の人々に仏教教団への尊敬と信頼を著しく失わせてしまったように見える。開祖によって唱えられた宗教性や宗派の意義は著しく変質し、衰退してしまっているようである。

〔外的状況〕

(1) 寺院の経済的状況

宗派や地域、寺院の事情によって異なるが、既存の活動を続ける限り、高齢化社会・少子化社会の到来によってその日常の宗教活動も減少し、経済状況も著しく悪化するであろう。今以上に兼務の僧侶が増加し、僧侶の質の低下、僧侶としての自覚の低下を一層加速する。経済的状況の悪化は宗派・寺僧の弱体化とパラレルである。

(2-1) 檀家から僧侶・寺院はどう認識されているのか

寺院の実情を知っている檀家は〈僧＝聖〉とはほとんど認識していない。僧侶は寺院管理者であったり、儀礼・法式の専門家と認識している。また、僧侶や寺院は先祖供養などを介した限定的な関係でしかない。そうした結果であろうか、檀家はその宗派の教えに関する知識も興味もない状態である。他方で、僧侶は我々俗人とは違い尊敬すべき、時には聖なる存在であってほしいと漠然と願っている面もあるが、現実とのギャップで寺僧との係わりが一層薄まっている。

(2-2) 世間一般から仏教はどう認識されているのか

世間一般から仏教はほとんど理解されておらず、興味も示されていない。況んや、宗派の存在や教義を理解しているものは極めて少ない。一方で、漠然と世俗性を離れた仏教者、仏教者集団という認識もある。こうした認識の曖昧さが、寺僧や仏教界の現状を直視することから妨げているのかもしれない。

(3) 寺院の意義

一部の寺院は、観光寺院として、癒しの場として存在意義をもつ。一般の寺院に対する係わりは、ほぼ先祖供養などに関する事柄に尽きる。世間一般には、寺院が属する宗派の区別はほとんどない。

3　今後に向けての提言

(1-1) 宗派の自己矛盾

時代・地域・人間の能力などに相応した教えが出現する連続性が仏教の在り方であることと、他方で開祖の教えを守り続けるという宗派の在り方をどう考えるべきであるか。この在り方は、ある意味、二律背反の関係を呈している。どの宗派も成立した時にはその時代にふさわしい理由があったが、時代や状況が変わった時、その意義も変容しているはずである。

(1-2) 宗派が取るべき道(1)　―　宗派内改革か、脱宗派か

宗派内での自己改革を進めようとするのか、或いは宗派の枠を超えて新しい改革を成し遂げようとするのか、重大な選択に迫られている。宗派内改革であろうと脱宗派であろうと、宗派は現代に即した新たな改革が要請されていることを自覚し、宗派間を超えて共に新たな宗教運動も考えなければ、日本においてもはや仏教は存在できないであろう。

(1-3) 宗派が取るべき道(2)　―　対社会的改革

どちらの選択であろうと、宗派の価値観だけを優先するような内向きな改革であれば自己満足に終わり、時代の要請に応えられない。現代社会を直視し、切実な声に呼応した改革こそが、仏教界が今しなければならない重要課題である。時に宗派自体の抜本的変革が要請されることも覚悟しなければならない。僧侶、在家仏教者、一般人が共に知恵を出し合える改革の場を仏教界は設定すべきである。

(2) 現代および近未来に向けて仏教に望むこと

今までに経験しなかった社会状況の到来を直視し、それに対応できる活動が望まれる。各宗派の僧侶は、その活動の対象・範囲を外に向け、同時に宗派の教義に依りつつも仏教界全体が共に活動できる許容性を相互にもたなければならない。寺院は、従来の檀家制度の枠組みから地域共同体（コミュニティ）の中心的役割へと移行すべきではないか。コミュニティの中での避難所という位置づけによって、新しい「寺院・僧侶と地域の人々」という枠組みが形成されるべきであろう。寺院は仏教活動の最前線であり、この寺院を拠点とした積極的な活動は意義深い。

(3) 僧侶のあるべき姿

時代を創出する偉大な仏教者の出現が叶わなければ、仏教者たちが協力し合って新たな運動を起こすほか道はない。

これからの僧侶像を次の三種に分類してみた。

①修行を実践し、人格の完成をめざす仏教者という存在

―　修行を重ね仏道を歩み人々の心のよりどころとなる聖なる宗教者として

②社会的役割を果たすべくコミュニティの中心として人々の現実生活における救い手となる存在

―　社会活動者として

従来型の僧侶からこうした社会状況に対応できる僧侶への転換が望まれる。こうした人材養成には従来までの宗侶養成などにおける教育の転換も望まれる。

③寺院管理者や、儀礼・法式の専門家として活動する存在

— 寺院管理者、仏教儀礼の専門家として

今後、これらのいずれにも当てはまらない僧侶は陶汰されていくであろう。こうした分類は、僧侶の存在を明確化する意義をもつ。僧侶がどういう仏教者であるのかを自覚することは、新たな仏教活動を呼び起こす第一歩になろう。

4 おわりに

現代の仏教界の枠組みの多くは江戸幕府の政策によるものであり、仏教界の自発的、主体的な制度改革ではなかったことは、仏教界にとって根本的な問題を孕み続けることになった。

今、求められるのは、仏教界がそうした抑圧ともいうべき歴史から脱して、この日本の現代社会にふさわしい人々の要請に謙虚に耳を傾け、自発的、主体的な関わりによって人々の避難所ともいうべき寺僧を確立することではないであろうか。宗派という既存の枠組みの中から時として超え、新たな枠組みを摸索しつつ、コミュニティーの中核として、現代社会に生きる人々の苦悩とその病巣を的確に捉え、それに応えうる活動を行うことが、未来に向けた仏教改革の第一歩となるであろう。仏教の歴史は、常に時代と空間に即した改革の連続によって生まれ変わり歩んできたことを再確認すべきである。